

新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る

令和3年度 業務報告書

1. 入館状況について

令和3年度総入館者数 418,578人(対前年度比 114.9%)

[総括]

指定管理者として5年間の指定管理期間のうち、3年目の管理運営を行った。コロナ禍の中、充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様の安全・安心を第一に考え、満足度向上に努めた。

今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受けた1年となった。令和2年2月29日に新潟市で初めて感染者が確認されて以降、入館者数は例年と比較し減少傾向が続き、今年度に入ってから感染拡大は収束せず、感染対策を行いながらの管理運営となった。8月頃には新型コロナウイルス変異株「デルタ株」が急速に拡大したことから、昨年度のゴールデンウィークに続き9月3日～16日の間、臨時休館を行った。また、年明けの1月頃から、新型コロナウイルス変異株「オミクロン株」が猛威を振るい、1月21日に新潟県内では初めてのまん延防止等重点措置が適用され、当館は臨時休館することはなかったが、来館者は大きく減少した。施設管理者として十分な感染症対策を行いながら開館を続け、最終的には418,578人で対前年度比114.9%と昨年度と比べ増加したものの、コロナ禍前の水準には及ばず、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数500,000人以上を維持することが出来なかった。

入館者数を月別でみると、4月は昨年度、全国緊急事態宣言が発出されたことを受け4月21日から臨時休館を行い、その影響で入館者数は3,300人程であった。今年度は休館せず通常開館を行うことが出来たが、新潟市に4月21日から特別警報が発令され、全国的にも「第4波」の中で外出自粛や都道府県を跨ぐ移動の自粛が呼びかけられたことにより、コロナ禍前の水準には戻らなかった。新潟市の特別警報は5月9日までの発令であったため、集客が見込めるゴールデンウィークでは、コロナ禍前の令和1年度比で35.0%であった。特別警報解除後、遠足による幼稚園・保育園の団体の入館が少しずつ戻り始めたが、「第4波」の影響は続き5月は昨年度比で299.6%であったものの、コロナ禍前の令和1年度と比較すると65.9%であった。6月は新潟県独自の警報は引き続き発令されていたが、週末はコロナ禍前の令和1年度の入館者数を上回ることも多く、徐々に増加し始めた。最終的に6月は対前年度比125.6%、対前々年度で89.2%まで回復した。7月は新規感染者数が減少傾向となったことから1日、新潟県全域に発令されていた警報が注意報に移行されたものの、新規感染者数が再び増加に転じたため、7月16日には再び警報が発令された。開催が延期された東京オリンピック・パラリンピック競技大会特別措置法等の規定に基づき、今年度も海の日・スポーツの日が移動され7月22日から4連休となった。7月23日には今年度で最大である4,978人のお客様にお越しいただいたこともあり、7月は対前年度比128.6%、対前々年度比100.7%とコロナ禍前の水準に戻った。8月に入っても全国的に感染拡大は収束せず、第5波の中、集客を見込めるお盆期間も外出自粛要請により県外客、帰省客が減少したため、昨年度と同様、入館者は伸び悩んだ。また、7月13日に生まれたカマイルカを8月2日に親子一般公開するなど話題はあったが、8月の入館者数は対前年度比108.4%、対前々年度比61.8%となった。9月は、8月30日に新潟県内全域に特別警報が拡大されたことにより、9月3日から16日まで臨時休館となった。下旬に大型連休(4連休)があり、ある程度の集客はあったが、臨時休館が影響し、対前年度比47.2%、対前々年度比45.2%となった。上半期終了時点で対前年度比125.5%、対前々年度比

70.2%であり、コロナ禍前の水準には届かない状況であった。10月には昨年度実施した観光需要を支援するためのGotoトラベルキャンペーンは実施されなかったが、新型コロナウイルス新規感染者が減少傾向にあることから、10月1日に緊急事態宣言が全国的に解除された。これに伴い県を跨ぐ往来自粛要請も緩和された。来館者数もコロナ禍前の水準に回復し、10月は対前年度比103.3%、対前々年度比96.8%となった。11月に入っても新型コロナウイルス新規感染者は減少を続け、11月はリニューアルオープンした平成25年度に次ぐ入館者数となった。最終的に11月は対前年度比106.2%、対前々年度比125.7%となった。12月も新規感染者数は減少傾向にあり、雪による影響もなかったことからコロナ禍前の水準を回復し、対前年度比115.3%、対前々年度比111.8%であった。しかし、1月に入ると状況が一変し、オミクロン株が全国的に猛威を振るい、感染が急拡大したことから、1月21日に新潟県では初となるまん延防止等重点措置区域に指定された。新潟市内の公の施設の一部が臨時休館となったが、当館は休館することなく、昨年に続き冬場の集客対策として、年間パスポート購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」や成人の日企画「新成人及びその同行者の入館料免除」を実施し入館者促進を図った。しかし、入館者数は減少し、昨年度ほどの雪による大きな影響はなかったが、対前年度比132.5%、対前々年度比69.2%とコロナ禍前の水準には達しなかった。2月に入ってもオミクロン株による感染の拡大は続き、2月2日には新潟県で過去最高となる700人の新規感染者数が確認され、2月20日期限のまん延防止等重点措置区域の指定も3月6日まで延長された。2月も雪による大きな影響はなかったが、前年度比72.7%、前々年度比60.9%であった。3月に入ると新規感染者もピークを過ぎた。3月6日にまん延防止等重点措置区域の指定が解除された。来館者数も増加傾向となり、下旬の3連休の中日には3,000人を超えるお客様にお越しいただき、最終的に3月は対前年度比101.4%であった。

依然として新型コロナウイルス感染症拡大の影響が続き、いつ収束するか全く予測がつかない状況であるが、指定管理者として管理運営をしっかり行い。このような状況下でも来館して下さるお客様のため、安心・安全に観覧していただけるよう努めていきたい。

年間パスポートはコロナ禍の中、昨年度の13,482人から1,510人増加し、14,992人ものお客様に購入していただき、平成20年度の導入以来、過去最高の数となった。新型コロナウイルス感染拡大が続く県を跨ぐ移動が難しい中、新潟市内の方が近くの施設を訪れ、パスポートを購入していただいた結果だと思われる。過去最高を記録したことは、新潟市の施設を管理する指定管理者として大変喜ばしいことである。例年どおり、年間パスポートの宣伝や、購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」、館内出口付近に当日の入館券に追加料金をプラスすることで年間パスポートに切替ができるというポスター掲示やチラシの設置を継続して行い、多くのお客様から年間パスポートへの切替をしていただいている。パスポート所持者の平均年間来館回数が1人あたり6.0回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等手帳」「老人施設」「小・中学校」「保育園・幼稚園等」など対前年度比100.9%とほぼ同数であった。減免利用者総入館者数は、13,059人と総入館者に占める減免利用者の割合は3.1%となっており、コロナ禍であっても当館の果たすべき社会的役割は依然として大きいと考えている。

毎月実施していたアンケート調査は、新型コロナウイルス感染防止のため従来の対面式から、出口付近に調査用紙を設置し無人で行った。展示生物に対する満足度が97.4%を確保しており、「とても満足。楽しかった。また来ます。」「とても素晴らしかったです」「楽しい時間をありがとうございました」「沢山の生き物を見て楽しめました」「イルカショーは何度見ても楽しくすごいと思いました」「全館きれいで清潔感があって良いです」などの感想が寄せられている。また、「清潔感があり、空気もきれい」「コロナ禍でも楽しく安心

して見れました」「レストランの店員さんがとても親切にしてくれたのがうれしかったです」など新型コロナウイルス対策や展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。

今後も、常におもてなしの心を持ち、十分な感染対策を続けながら「行ってみたい」「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

(1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

[総括]

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

例年行っている繁忙期における開館時間の繰り上げ・延長は、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止対策もあり、来館者の密を避けることを考慮し実施した。市民サービスの提供と感染症拡大防止対策という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

ゴールデンウィークでは、5月1日(土)から5日(木・祝)の間、開館時間の60分繰り上げを実施した。

次に東京オリンピック・パラリンピック競技大会特別措置法等の規定に基づいた7月22日(木・祝)～25日(日)の4連休、夏休み期間中の7月31日(土)、8月1日(日)、8月7日(土)～9日(月・祝)と13日(金)～16日(月)のお盆期間で開館時間の60分繰り上げを実施した。入館者が増加し、来館者が密となるため、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であったと思われる。感染状況やお客様の入館動向を把握し、適切な開館時間の繰り上げ・延長を実施し、市民サービス、感染対策のため目的を十分達成した。

例年1月2日・3日は、市民サービスのため臨時開館を実施している。みなとトンネルからの人の流れも多く、マリニピア日本海の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から混み合う。昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で初詣客が少なかったが、今年は例年並みに回復した。正月開館は定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第42条に基づく電気設備法定点検を3月3日(木)・4日(金)で実施した。休館日は「12月29日から1月1日」と「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のため3月の第1木曜日とその翌日」しかなく、今後も工事スケジュールを組むことが困難となる場合がある。

今後も開館時間の変更については、感染状況及びお客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービス、感染対策に努めていくことが必要である。

(2) 展示生物について

[総括]

協定書の仕様書に謳われている約500種、20,000点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大による県外への移動制限等で生物交換や採集活動に制約を受けたが、魚類輸送専用車両を計画的に運用し、展示コンセプトに沿った沿岸性魚類や深海性魚類、温帯・亜熱帯性魚類等を搬入した。

飼育困難生物への飼育展示にも積極的に取り組んだ。他園館の協力を受けて、令和 1 年度より日本海大水槽に導入しているスマは、今年度も水揚げ港の和歌山県串本町より 2 回搬入し、良好な展示状態を維持している。昨年度、リニューアル後としては初となったアオリイカの展示を今年度も行い、交接、産卵行動まで来館者に見ていただくことができた。新潟県内各地の漁業協同組合の協力により、特に深海性生物の収集、展示に努めた。ヒゲナガヤギウオ、ガンコ、ナガツカ、コンペイトウ等の魚類の他、オキノテヅルモツルや日本海固有種である両津湾産サラサベッコウタマガイを展示した。

国内希少種に指定されているコシノハゼを生息地の把握と生態の解明、啓発等を目的に環境省より許可を得て展示した。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。アカムツ(通称＝ボグロ)は人工育成技術開発を継続し、育成個体を「#18」水槽に群れで常設展示している。ホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノアカヒレタビラ、キタノメダカを「信濃川水槽」に、クラゲ類、クロベンケイガニ、アカテガニ、ゼンマイヤドカリ、セジロクマノミ、アカハライモリ、タゴガエル、アズマヒキガエルを「育成室」に展示した。7 月には、3 年連続となるカマイルカの繁殖に成功し、現在も母子ともに良好な状態を維持している。また、フンボルトペンギンは 10 個体が完全生育している。

昨年度末に東京都の葛西臨海水族園から搬入したウミガラス5羽は、ウミガラス飼育用の改修工事を終えた旧ラッコ水槽で 4 月より展示を開始した。夏場には繁殖行動も観察されたことから、今後の繁殖に期待したい。

「にいがたフィールド」で「にいがたフィールドガイド」を 4 回実施し、季節ごとの観察ポイントや自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカなどの紹介を行った。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていく。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

(3) 通年事業の実施状況について

① ペンギン解説

ペンギン散歩道(今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、通年ペンギン海岸で実施)でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。実施場所は屋外観覧導線に面しており、およそ 10 分の解説時間の中で気軽に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことに目的を置いている。

ハンドイルカ 2~3 頭、カマイルカ 1~4 頭を用いて 1 日に 4~5 回行っているが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、来館者のショーへの参加は取りやめ、また普段よりも短い 1 回 10~15 分の構成とした。内容は短いながらもイルカの種類、体の特徴、認知、行動能力などを解説し、楽しみながら自然に学べるショーを心がけた。また当館生まれのカマイルカも積極的にショーへ参加させ、イルカの成長をご覧いただけるよう心がけた。密集を避けるため、ドルフィンスタジアムのシート

には間隔を空けた着席を促すサインを貼り、ショー前には観覧者の協力を呼びかけるアナウンスを追加した。イルカに関する疑問が解消できるようショー後に設けている質問受付開催時は、ビニルフェンス越しに実施した。

カマイルカの出産に伴い7月10~20日の11日間ショーを中止した。また冬季のイルカショーは悪天候時のみ屋内プールでの開催を予定していたが、新潟県にまん延防止等重点措置が適応されたため、密集回避の目的で全日程屋外で実施した。観覧には厳しい日もあったが、来館者の安全を確保するための対策としてご理解いただいたようでクレーム等はなかった。

毎月実施しているアンケート調査では、概ね高評価をいただいている。

③ マリンサファリ給餌解説

アシカ科最大の種であるトドを用いて1日2回、形態や生態、野生の状況、人との関わり等についての解説を実施した。鰭脚類の特徴であるヒレ状の四肢や水の抵抗を受けにくい体の形などを来館者が見やすいように行動形成し、また、体の大きいオスを中心としたハーレムを形成する繁殖生態、現在の野生での生息状況、漁業被害と保全の難しい関係性などについて最新の調査結果等から得られた情報を基に解説した。

昨年度搬入した若いオスは順調に成長し、徐々に成獣オスらしい体形になってきていて、体重1トンの成獣となった時の展示効果を期待している。

④ ひれあし類解説

午前のマリンサファリ給餌解説終了後、マリンサファリ内でゴマフアザラシとカリフォルニアアシカに餌を与えながら解説した。アザラシ科とアシカ科の形態の違いなど、トドの解説では伝えることができない鰭脚類の分類を中心に解説を行っている。

⑤ 日本海大水槽解説

水生生物や海洋環境に関する知識の普及を目的に、日本海大水槽前で飼育員が解説を行った。展示生物の紹介から水族館のしくみまで多角的な情報を伝えるプログラムとして取り組んでいる。解説の内容は固定せず、新規の生物が展示されたり、繁殖行動が見られたりしている時などは、積極的に紹介するように努めている。今年度は、日本海で見られる回遊魚としてスマの群れ展示を行ったため、水槽での泳ぎ方を一緒に見ながら解説する時間を取り入れた。海洋生物について理解を深めてもらう良い機会となったと実感している。

⑥ 磯のいきもの解説

磯の体験水槽で、生物を1日1回、解説を交えながら近くで観察してもらう構成としている。今年度は、マダコをプログラムに加えた。脚だけが出せるように作成した特製の水槽にマダコを収容し、吸盤を軽く触ってもらう体験を実施した。生物にも参加者にも負担や危害の及ばない良好な方法であった。棘皮動物の解説では、様々な角度から撮影した解説パネルを使用し、体のつくりなどが分かりやすく伝える工夫をすることで、多くの来館者に興味を持って生物に接してもらえるよう心掛けた。来館者と直接対話するプログラム構成は、生物の扱い方や生息環境への理解を深めるのに有効であると実感している。

⑦ アクアラボ体験

アクアラボで水生生物に対する知識と理解を深めることを目的に、顕微鏡・カメラ・大型液晶モニターを用いて、観察や解説を行った。参加者の年齢に合わせて季節感を考慮した日替わりのテーマに沿って実施し、たいへん好評であった。今年度は、新たに 7 タイトルを追加して実施し、水生生物の知識普及に積極的に努めた。なお、密集を避けるため、定員を例年より減らして実施した。

(4) 生物展示関係イベント等の実施状況について

① 企画展示「マリンピア日本海 30 年のあゆみ 年表」

企画展示室内の壁面にパネルを設け、平成 2 年のオープンから 30 年間のマリンピア日本海の歴史を年表形式で紹介した。パネルには、年表で紹介されている生物を生体展示した小型水槽と動画モニターも設け、観覧者により興味をもってもらえるように工夫した。

昨年度から継続開催している企画で、当初計画した期間は令和 2 年 4 月 1 日～2 月 13 日であったが、同年 12 月 25 日から開催予定のフォトコンテストが新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止されたため、期間を令和 3 年 5 月 9 日まで延長した。

② 企画展示「マリンピア日本海 30 年のあゆみ 復活！ガラ・ルフア！ アカムツ展示への挑戦」

「復活！ガラ・ルフア！」では、2007 年から 2012 年まで展示し人気のあったガラ・ルフアを、期間限定で展示した。ガラ・ルフアは西アジアに分布する淡水魚で、人の皮膚をついばむ行動を体験できることで人気がある。今回、生体を 1m 四方のスクエア水槽に展示し、上部から手を入れてついばむ行動を体験できるようにした。パネルでは形態や観察のポイントなどを解説し、楽しいだけの体験にならないように工夫した。楽しみながら学べる機会を提供できたと考えている。

「アカムツ展示への挑戦」では、生体展示までの 10 年間の取り組みを、生体、パネル、映像を用いて紹介した。生体はアクリル水槽 1 台を設置し、当館で育成した 1 歳魚を紹介した。映像は、人工育成の様子や ROV 調査によって国内で初めて撮影に成功したアカムツの様子などを紹介した。アカムツの生体展示が成功するまでの採集から育成までの取り組み、生態を知るためのフィールド調査、他機関との共同研究などを詳細に伝えることができた。マリンピア日本海の活動を理解してもらう良い機会となった。

③ マリンピアカレッジ「むし博士入門」

講師として、新潟県立鳥屋野潟公園 公園管理事務所の浅野涼太氏を招いて、6 月 12 日に昆虫の多様性について興味・理解を深めることを目的として、昆虫の採集方法や同定方法など、観察ポイントを教わった。にいがたフィールドで昆虫採集・観察を行い、また、事前に準備した甲虫の標本作りにも取り組んだ。アンケートでは「最初はあまり興味がなかったが、参加しているうちに面白くなってきた」「色々な虫が知れて良かった」とあり、最も身近で多様な昆虫について、興味を持って接してもらいきっかけを作ることができた。浅野氏の話や打合せ時の昆虫採集、標本作り等、どれも普段の水族館の業務ではあまり踏み込めない分野であり、今後のプログラムに応用するための良い機会となった。参加者のプログラムへの満足度が高かったことから、今後も継続していきたいプログラムである。

- ④ マリンピアカレッジ「私たちのすぐそばにいるよ！新潟で暮らしている野生動物の世界」
長岡技術科学大学の山本准教授を講師に招いて、身近な野生動物の生態や生息調査から得られた情報、人との関わりなどを講演していただいた。近年、新潟市の人口密集地にも出現するようになっているニホンイノシシやニホンツキノワグマの生態や出現個体数増加の原因など、自身の研究や体験を基に楽しくわかりやすく話していただいた。
- ⑤ マリンピアカレッジ「生きた化石クロヌタウナギ」
自然教育研究センターの西山真樹氏を講師に招いて、新潟県内の漁業で混獲されて一部の地域では食材にもされているが、普段は人目に触れることがないクロヌタウナギの生態について講演していただくとともに、生体が出す粘液(ヌタ)に触ってもらうことで、この動物を知る機会とする予定であった。
直前まで準備をしていたが、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言や感染状況を勘案して開催を中止した。
- ⑥ マリンピアカレッジ「鳥から見た海の世界」
長岡市立科学博物館学芸員 鳥居憲親氏を講師としてお迎えし、海鳥についてのイベントを行った。クイズや剥製の観察を交えて、子供たちにもわかりやすく海鳥について知ってもらうよい機会となった。
- ⑦ マリンピアカレッジ「ハス博士になろう」
講師として新潟大学の志賀隆氏を招いて、ハスの生態や構造を紹介した。ハスは当館の屋外施設に生育しており、夏季から秋季にかけて観察できる。冬季は生育したハスを観察できないため、当イベントでは事前に採集しておいた葉、花托、地下茎(レンコン)、種を各参加者に配布して観察に用いた。葉は押し葉状に加工したものをを用いて撥水の実験、顕微鏡を用いて地下茎(レンコン)の断面から出る繊維や種の構造などの観察をおこなった。参加者は積極的に顕微鏡の観察や撥水実験をおこなっており、アンケートには「葉の仕組みがわかった」、「顕微鏡も使えて満足」とあった。ハスは食べ物として利用もされる身近な水生植物だが構造や生態を知る機会は少ないため、水生植物に興味をもってもらう良い機会となった。
- ⑧ マリンピアカレッジ「クラゲの不思議を覗いてみよう」
鶴岡市立加茂水族館館長の奥泉和也氏を招いて、クラゲについての講演の他、刺胞発射実験、摂餌観察、クラゲ試食などを企画した。開催日が新型コロナウイルスまん延防止等重点措置の期間と重なったため、感染拡大防止を考慮して中止となった。
- ⑨ 企画展示「海を流れる物」
「海を流れる物」では、漂着物の実物や調査資料を展示した。生体は、季節来遊魚のハリセンボン、流れ藻に集まるアミメハギ、浮遊するミズクラゲを展示し、海流と生物の関わりについて紹介した。海流による生物の季節来遊だけでなく、海洋を汚染するごみの問題にも触れた。海岸に漂着したゴミのほか、ゴミを産卵床や付着基盤としたバイの卵やエボシガイを展示し、海に多くのゴミが投棄されている現状と生物へ及ぼす影響について紹介した。また、近年関心が高まっているマイクロプラスチックの問題にも触れ、実際に新潟の海岸から採取してきたマイクロプラスチックを展示した。ごみ問題に

関しては、当館の SDGs の取り組みについても触れ、個人でも取り組める活動があることを知ってもらった。水族館が漂着生物の保護活動や死因調査を行っていることも紹介し、死亡漂着した生物は標本として保管していることに触れ、ステージに骨格標本(鯨類 2 種、カメ類 2 種)を展示した。企画展を通し、水族館が行う海洋調査の活動、海岸に漂着するゴミの問題などに関心を持ってもらうことができたと考えている。

⑩ 企画展示「ウミガラスってどんな生き物？」

今年度から展示を開始したウミガラスについて、環境省、北海道海鳥センター、Bird Life International などからご協力いただき、形態や生態、野生の状況、保全活動等を解説パネルやビデオ映像、標本等を使って紹介した。ウミガラスは、日本では野生の生息個体数が少なく、飼育下でも当館を含めて 3 施設でしか展示していない目に触れる機会が少ない動物であるため、本企画展示は生態の展示と合わせて、あまり知られていない動物を紹介するよい機会になったと考える。

⑪ 企画展示「第7回フォトコンテスト」

応募期間:9 月 16 日～12 月 6 日(応募点数 260 点)

展示期間:1 月 17 日～2 月 27 日(展示点数 137 点)

今回が 7 回目の開催。新型コロナウイルス感染拡大に伴う臨時休館により、応募開始日を 2 週間程度遅らせることとなったが、入賞作品の展示を冬期のオフシーズンにすることで、長期間に渡っての話題づくりとなることを想定して実施した。応募点数は、新型コロナウイルス感染症の影響により一昨年度より少ない応募数(一昨年度 346 点)であったが、本企画が定着している考えられる。

⑫ 企画展示「新潟のタナゴ」

新潟県内に生息するタナゴ類は、在来種 2 種、国外外来種 1 種、国内外来種 2 種の 5 種である。その全種と、繁殖に必要不可欠で産卵母貝とも呼ばれるイシガイ科貝類を 6 つの水槽を用いて展示し、生きた二枚貝の鰓の中に卵を産むという特異な繁殖生態や、在来種の減少と外来種の増加、新潟県では絶滅したとされていた種の移入による生息など、種それぞれの現状を紹介した。また、当館の繁殖の取り組みも併せて紹介することにより、地域固有の生物の減少に警鐘を鳴らし、生物多様性の重要性を唱えた。新潟県に生息する淡水生物の現状について知ってもらう良い機会になったと考える。

⑬ ダイオウイカ標本展示

4 月 2 日に西蒲区五ヶ浜に死亡漂着した全長 2.4m のダイオウイカ 1 個体を搬入し、生鮮標本として 4 月 3 日から 4 日の 2 日間、屋外で展示した。標本は展示終了後、島根大学と東京大学大気海洋研究所の研究チームが来館し、繁殖に関する調査のため解剖し、サンプル提供した。

⑭ サケガシラ標本展示

4 月 3 日に西蒲区角田浜に死亡漂着した全長 1.6m のサケガシラ 1 個体を搬入し、生鮮標本として 4 月 4 日に、ダイオウイカの標本展示の隣で展示した。

⑮ カマイルカ(2019、2020 生まれ仔)、トド愛称募集

2019年7月29日と2020年8月4日に産まれたオスのカマイルカ、2020年12月に伊勢シーパラダイスから搬入したオスのトドの愛称募集を5月15日から31日まで館内で実施した。応募総数968通の中から、館内で検討した結果、カマイルカは「ジャック」「リク」に決定し、トドは「テツ」に決定した。名付けてくださったそれぞれ1名、計3名の方に年間パスポートをプレゼントした。従来より実施していた「命名式」は新型コロナウイルス感染症の影響により実施しなかった。

⑯ ミナミイワトビペンギン解説

高齢による失明のため2017年に展示を終了してバックヤードで飼育しているミナミイワトビペンギンを、10月と11月の毎週金曜日にペンギン散歩道に連れて行き、実物を見せながら形態や生態について解説した。フンボルトペンギンとの比較により、ペンギン類の多様性も紹介できたと考える。

⑰ いきもの教室

8月、1月、2月の計3回を計画したが、2月の「鳴き声に注目」は新型コロナウイルスまん延防止等重点措置により中止した。対象年齢は8月の「貝の標本づくり」が小学生以上、1月の「いきものホネホネ観察」が小学4年以上であった。20名の定員に対する応募率は8月が595%、1月が100%で、例年の傾向であるが夏休みの自由研究に役立つプログラムの人気度が再確認された。募集の告知は「市報にいがた」「当館ホームページ」「館内での募集」「長期休暇前に市内の小学校にチラシを配布」などで行った。実施後のアンケート結果を見ると、100%の方が「とてもおもしろかった」「おもしろかった」、97%の方が「今度またぜひ参加したい」「今度また参加したい」と回答し、参加者の満足度は高かった。

⑱ にいがたフィールドガイド

4月、5月、6月、10月に各1回、約20分間のプログラムを計4回実施した。にいがたフィールドに生息する動植物とシナイモツゴなど絶滅危惧種の生息域外保全などについて解説するプログラムで、合計41名が参加した。水中にいるため観察しにくい魚類などは、事前に採集してプラケースに入れ観察し易くしたり、写真パネルを用いたりして、分かりやすい解説を心掛けた。観察できる動植物が季節によって異なるため、リーフレットを作成し、終了時に配布することで情報を補足した。感染症防止対策として、スタッフと参加者ともにマスク着用と手指のアルコール消毒を実施し、参加者が多い場合は、密集を避けるためグループに分けて案内した。身近な水辺環境への関心を持ってもらう機会となったと感じている。普段の展示だけでは伝えきれない情報や魅力伝えることができるプログラムとして、継続を考えている。

⑲ ペンギンの日イベント

4月25日の「世界ペンギンの日」に合わせて、直近の4月24日(土)・25日(日)の2日間にもっとペンギンを知ってもらえるイベントを開催した。また、4月24日(土)から5月21日(まで)アクアラボで解説パネルと標本の展示を行った。土曜日はアクアラボ内で標本・当館の繁殖の取り組みを展示してクイズコーナーを設置し、日曜日にはバックヤードを含むガイドツアーを2回実施した。今後も継続的に実施して、あまり知られていないペンギンの生態や形態、野生の状況などについて、ガイドツアーやクイズを通して楽しみながら知ってもらい、ペンギンをきっかけとして生物の生息環境に関心を持ち、さらに身近な自然環境に興味を持ってもらえればと考えている。

⑳ カワウソの日イベント

5月の最終水曜日がInternational Otter Survival Fundにより「World Otter Day」と定められていることから、直近の5月22日(土)・23日(日)の2日間にカワウソ類を飼育する国内約40園館と歩調を合わせる形でイベントを開催した。また、5月22日(土)から7月21日(水)までアクアラボで解説パネルの展示を行った。両日とも、アクアラボで生態や分類、飼育の工夫、野生の状況などについて解説した後、給餌観察と毛皮触り体験を行い、概ね好評価を得た。今後も継続的に実施して、より多くの人が身の周りの自然環境について考えるきっかけになればと考えている。

㉑ 田んぼ体験（田植え、稲刈り、脱穀、稲わら体験）

リニューアルで造成した田んぼで田植えから稲刈り、脱穀までの稲作の体験と収穫したワラを使ったワラ細工体験をおこなった。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止としたため、今回が7回目の実施となる。当館の事前募集プログラムとしては希少な4歳以上という幼児も対象にしたプログラムであることから幼児を含む親子の応募が多かった。応募数は定員11～12組のところ73組の応募があった。残念ながら脱穀(10月17日)が荒天となり中止となったが、全体を通しての参加者の満足度は高かった。田植え、稲刈り、稲架がけ、脱穀(今年度は中止)、稲わら工作与稲作の一連の流れを体験でき、また、そこにいる生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境教育としても十分機能していると考えられる。

㉒ 野外体験教室「スナガニ野外観察会」

水族館の地先海岸の砂浜で、スナガニをメインに観察・採集を行い、どのような生き物が砂浜を利用しているのか理解・興味を深めることを目的として、7月17日に実施した。巣穴構造を理解してもらうために、石膏で型を取るなどの工夫をした。アンケートに「身近な砂浜にこんなにスナガニがいることを知り、驚きました。」とあり、地域の自然環境に興味を持って接してもらうきっかけを作ることができた。有意義なプログラムであったと実感している。

㉓ 野外体験教室「潟の生きもの観察会」

実施日は、9月26日(日)で、参加者は16名であった。水辺へのアクセスの良さ、駐車場が隣接するなどの理由から上堰潟公園を開催地とした。公園の池と周辺水路にて水生生物の採集と観察を行ったり、「上堰潟公園を育てる会」の協力で田船体験を併せて実施したりしたことにより、より楽しく学べる場となった。新潟市が誇る水辺環境である里潟の価値と魅力を伝えることができるプログラムとして、継続を考える。

㉔ ナイトツアー

8月と9月に2回ずつ計4回実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大による臨時休館のため9月の実施が中止となり、8月の2回のみの実施となった。参加費が入館料及び500円と、当館のイベントの中では高額な部類に入る企画であるにもかかわらず、ナイトツアーの人気は高い。通常観ることのできない閉館後の夜の水槽の様子を観察してもらい、昼と夜での生き物の活動の違いや外観の変化等をツアーガイド形式で解説し、水生生物の生態や自然環境への関心を深めてもらった。完成されたプログラムとして継続を考える。

②⑤ 船にのって水草刈りと泥上げ体験

潟やため池等の陸水環境と人との関わりを、にいがたフィールドでの体験と、新潟市歴史博物館の学芸員による講演で学ぶプログラムである。実際に労働の大変さを体験し、講演で作業の大切さや歴史を知ることにより、より深い理解になったとアンケートからも伺えた。また、本プログラムは今年度で3回目であるが、今回初めて定員の倍以上の応募があり、かつ応募者に中学生や高校生が多かった。当館の発信したい環境教育とそれを希望する方々を繋げられるようになってきたと思われる。

②⑥ イルカバックヤードミニガイド

10月23日～12月11日までの土曜日、計8回実施した。密集を避けるために参加者を4組とし、抽選場所をイルカ屋内プール観覧席とする等の感染症対策を講じて開催した。参加希望者は最小4組8名(11月13日)、最大17組48名(12月4日)とばらつきがあった。あらかじめ本イベントをご存知の方が多く、また終盤になるほど希望者が多かった。やっと当選したとの声もあり、毎年行っているため認知度が上がっているように感じた。実施時間は45分で、イルカの飼育設備の裏側を紹介し、質疑応答を行う内容とした。参加者アンケートの結果は、とても面白い・面白いが約97%と高評価であった。

②⑦ 育成室開放

通常入ることのできない育成室を職員立会いの下、入館者に開放した。育成室内には解説パネルを設置したが簡易なものとし、参加者が注目している物に対しては職員が解説を行なった。特に質問の多い物や注目してほしい物には大きめのパネルを用意した。11月から3月の第3土曜日に実施予定であったが2月は新型コロナウイルス感染拡大に伴うまん延防止等重点措置の発令により中止となった。その他の日程でも新型コロナウイルスの影響を考慮し、入室者数を入口でコントロールしながら実施した。水生生物への関心を深めてもらう機会として継続を考えている。

②⑧ ペンギンイベント

通常の展示ではほとんど見ることのできないフンボルトペンギンの繁殖について、12月10日から3月31日まで、解説パネルと参加者募集型の解説で紹介した。解説パネルは、ペアリングから交尾、産卵、育雛、巣立ちまでを紹介した。また、参加者募集型の解説は、「たまごの話」と「ヒナの話」を別の日にもうけて、1回4組の参加者を決めて実物や映像を交えて解説した。ただ、新型コロナウイルス感染症に対するまん延防止対策等特別措置の発令により、1月22日以降の参加者募集型解説は中止とした。

②⑨ 大人向け水族館教室「写真教室」

フォトコンテストと連動する形で実施した。水族館の楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することはとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について当館職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらえたと考えている。

③⑩ 大人向け水族館教室「水族館講座」

大人向けの講座は毎年複数回実施し、年度によって複数回を同一の参加者で開催する場合やその

都度募集する場合など、変化をもたせながら実施してきた。今年度は、4回計画し、対象を「視覚障害者」「聴覚障害者」「年間パスポート保有者」「乳幼児とその保護者」とし、それぞれ募集した。この内、年パス保有者以外の3つは対象者として初めてであることから、外部機関に協力をお願いしながら募集や当日運営を行った。

「視覚障害者向け」(11月13日)は、参加者の募集として新潟県視覚障害者福祉協会に依頼し会員へメールで広報していただいた。また新潟県立盲学校へも広報を依頼した。定員としていた10名には届かなかったが、実際に実施してみて6名くらいがベストな人数だったと感じた。介助犬も1頭参加したが、館内見学の際にも他の来館者からのアクセスなどもなく良かった。当日は、新潟県視覚障害者福祉協会の職員と新潟市文化政策課職員が見学に来た。視覚障害者福祉協会職員は視覚障害者への対応のプロであることから、後日コメントをいただいたが、非常に評価していただき、また改善点なども具体的に指摘してくださった。参加者の満足度も高く、アンケートでは全員が「とても面白かった」を選択した。

「聴覚障害者向け」(12月18日)は、募集の広報として新潟市障害福祉課を通して「新潟市ろうあ協会」「新潟県中途失聴・難聴者協会」に依頼して会員へ広報していただいた。応募が4名と少なかったのは今後の課題である。手話通訳(無料派遣)を新潟市障害福祉課へ依頼したところ、指定管理者からの依頼だと無料派遣はできないということから、文化政策課に協力を依頼し、文化政策課から依頼することで手話通訳を2名派遣してもらえた。聴覚障害者は「見える」ことから対象から見落とされがちであるが、参加者からの評価も高く、今後も定期的の実施できると良い。

「年間パスポート保有者」(2月5日)は新型コロナウイルスの影響で中止した。

「乳幼児とその保護者」(3月12日)は副題を「パパママ水族館」として実施した。乳幼児を育てている保護者が乳幼児と一緒に水族館を楽しんでもらうだけでなく、預かり保育の時間を作り保護者が自由に水族館を楽しむ時間を設けた。定員を5組程度としたが、子どもの人数を考慮して4組とした(子どもは9ヶ月から3歳0ヶ月までの7人)。応募者は参加者の約4倍とニーズの高さが伺えた。また、参観者の満足度も高く、特に預かり保育については、「久しぶりにゆっくりと見学できた」「初めてイルカショーの解説をじっくり聞くことができた」などの感想をいただいた。保護者への学びの提供もできたと思われる。保育者は4名依頼した。4名とも普段より子育て支援などを行っている方のため、保護者の相談などへの対応もしていただいた。今後もこのような取り組みを継続していく必要を感じた。

(5) 企画イベントの実施状況について

① 2022年オリジナルカレンダープレゼント

毎年恒例のプレゼントとして、11月15日から引換券を提示した先着1,200名へオリジナルカレンダーをプレゼントした。

② クリスマスツリー展示

11月20日から12月28日の間、マリニピアホール(円柱水槽側)に高さ4.5メートルのクリスマスツリーを展示した。また、一昨年実施した新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式及びクリスマスミニライブは今年も新型コロナウイルス感染症拡大の影響により実施は見送った。

③ 門松展示

1月2日から7日の間、正面入口に門松を設置し、お正月の雰囲気を出した。

④ 新成人キャンペーン

1月2日～16日の間、成人式会場で配付したクーポン券チラシやスマートフォンなどで当館HPのクーポン券などを提示した新成人及び同行者1名を無料入館とした。また、館内レストランの割引クーポン券も併せて配付した。期間中、292人の新成人とその同行者263人が来館した。

⑤ 年間パスポート販売キャンペーン

昨年度に引き続き、年間パスポート購入者へ館内ショップ・レストランで使用できる割引クーポン(大人500円分、小人200円分、幼児以下にはシール)をプレゼントした。当初、期間を1月11日～2月10日としていたが、キャンペーン期間中に新潟県がまん延防止等重点措置区域に指定され、来館されるお客様が減少したことから期間を1ヶ月延長し、3月10日までとした。期間中2,700人が購入し、昨年度の2,013人、一昨年度の2,665人を上回り、期間を延長した効果があった。

(6) 専門的な調査・研究等について

[総括]

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で各種会議や研修会の多くがWeb開催となったが、他園館との最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図った。また、日本動物園水族館協会生物多様性委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。3月から開催した企画展示「新潟のタナゴ」など、絶滅が危惧されている希少種や、特定外来生物が生態系に与える影響についての情報を、状況に応じて積極的に発信している。

日本水族館協会の第2回水族館研究会Web会議では、「飼育下におけるスズメダイの繁殖」を発表、日本野生動物医学会Web会議では、「黄体の自発退縮と子宮蓄膿症を合併したカマイルカ」をポスター発表、新潟県環境企画課、新潟市環境政策課等が主催する、ちょ～生きもの発表会では、「身近なカニの話」を発表した。

他の研究機関との水生生物に関する研究も積極的に行った。水産庁栽培漁業総合推進委託事業の一環として、国立研究開発法人水産研究・教育機構日本海区水産研究所、富山県農林水産総合技術センター水産研究所とアカムツの種苗生産技術の開発に関する研究を行い、アカムツの親魚養成技術の開発を担当し成果を報告した。環境省生物多様性保全推進支援事業の「新潟県産コシノハゼ生息域外保全」として、コシノハゼの飼育と県内の生息地調査を行い、生活史および繁殖生態の解明を進めている。

他園館との共同調査では、長岡市立科学博物館とスナガニの生息調査を行った。

生体入手の困難な種の飼育展示のための調査・研究でも成果を得た。日本海を特徴づける魚類の展示種数を増やす努力をし、地域の自然の情報発信に努めた。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「親子魚探検隊」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況を明らかにした。関川村タランベクラブの「親子で川遊び - 川の生き物観察会」および、NPO ネットワーク福島潟の「福島潟いきものしらべ水生動物観察会」に講師として参加し、水生生物について解説した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

(7) 総合学習等の受け入れ状況について

[総括]

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子どもたちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めるキャリア学習の一環としての総合学習にも対応している。

今年度は新型コロナウイルス感染症による臨時休館の影響で9月前半に予定されていた3校が中止、1校が延期となった。また、新型コロナウイルス感染症の影響で、修学旅行を県内での旅行とする学校が増えたことから、これまであまり無かった新潟市外の小中高の利用が目立った。修学旅行は学年全員を受け入れる必要があることから、2回に分けて実施するなど多人数への対応も積極的に行った。最終的に、学校数は新型コロナウイルス感染症の影響前の水準に戻り、参加人数は多人数への対応により過去最大に近い人数となった。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や感想が寄せられている。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行ってきたい。

(8) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

[総括]

実習生等の受け入れとして、専門学校生を対象に「飼育実習」、大学生を対象に「インターンシップ」「獣医実習」「博物館実習」を行っている。実習生は県外からの学生が多いことから、今年度は全て受入れを中止した。しかし、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、専門学校生・大学生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行ってきたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を行った。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により回数は少なかったが、内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室(屋内)での生物や仕事についての講義・指導」であった。対象が小学生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

毎年度継続して実施していた新潟大学臨海実習については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたい。

教育現場への講師派遣は、小学校への職業講話が6校、中学校への職業講話が1校、専門学校が1校であった。

感染状況を考慮し、今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

(9) 市民ボランティアの活動の状況について

[総括]

ボランティア活動の目的を大きく「水族館(専門家)と来館者(非専門家)をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、昨年度同様新規募集を中止した。昨年度と違い、活動自粛期間は設定しなかったが、ボランティアには高齢者も多いことから「新型コロナウイルス感染症に関して不安をお持ちの方は活動を自粛してかまいません」というメッセージを送った。また、活動する際には体調管理の徹底とマスク着用をお願いした。

活動状況は活動日数 54 日(令和 2 年度=45 日、令和 1 年度=139 日)、活動延べ人数 91 人(令和 2 年度=65 人、令和 1 年度=390 人)であった。昨年度に比べて若干増えているものの、新型コロナウイルス感染症の影響により昨年度に比べると 1/3~1/4 であった。

来年度もしばらく新型コロナウイルス感染症拡大の影響が続くことが予想されるため、ボランティアのモチベーション維持の工夫を考え、水族館・来館者・ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、この困難な時期を乗り越え持続的なボランティア活動を目指していきたい。

(10) 広報および広告宣伝について

[総括]

今年度の広報および広告宣伝について、新型コロナウイルス感染症を考慮し、新潟県内を中心に行った。コロナ禍で県外からの来館が難しい中、総入館者に対する年間パスポート購入者及び利用者の割合が増加している。年間パスポート会員はほとんどが新潟市在住であることから、一定の広告効果はあったと思われる。

① テレビ CM とラジオ CM

テレビ CM は、8 月まで通常 CM として、「いきものカード」シリーズを放映した。9 月からは新シリーズ「いきものの、アレどこ?」を放映。また、県内、山形、福島のテレビ局の CM 付帯パブリシティ枠にて、時期に合わせた PR を多数実施した。TeNY では夕方の情報番組内で月 1 回「わくわくマリニピア」を放送し、生物とイベントの告知を行った。

ラジオ CM は、BSN ラジオおよび FM 新潟で放送した。加えて、夏期は BSN ラジオにて館内からの生中継と、スタッフが生出演し、スタジオからリスナーの質問に答えた。FM 新潟ではスタッフが出演し企画展示などの PR を実施した。

② 雑誌・新聞などの紙媒体への広告

雑誌は、知名度が高い年刊誌(全国誌)及び県内の月刊誌(子供の遊び場特集)へ継続掲載した。

また、新聞は、産経新聞 新潟・長野・山梨版で月 2 回生物コラムを連載した。

さらに、12 月よりこども環境新聞エコチル新潟版へ、月 1 回生物情報の提供を開始した。

③ WEB

オウンドメディアへの展開としては、当館ホームページ、Twitter、LINE@、Facebook、Instagram などの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。また、現場の飼育スタッフによる Twitter アカウントから、タイムリーな生物情報の発信に努めた。

また、有料 WEB 広告として、2 月に新潟県内向け yahoo 広告を実施した。

④ プレスリリースなど

プレスリリースは、各イベント・生物情報を積極的に行い、全てのリリースに対して取材の申し入れがあった。ペンギンのタグ交換では、絶滅危惧種の保護活動と生物の多様性を維持する取り組みを、カマイルカ 3 回目の妊娠出産では、安定した飼育技術の PR につなげることができた。

⑤ その他

「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」の一つとして位置づけており、その主なものとしては、小学校に直接配送するチラシを今年も実施し、新潟、福島、山形に配送した。また、全国・地方テレビ番組からの生物に関する質問や写真映像等の借用依頼にも積極的に協力し、番組内で館名をクレジット表示してもらうことにより、館名と専門性の認知度向上に努めた。

ほかには、コロナ禍で各種イベントの中止が続く中、安全に実施できる条件を見極めてアルビレックスホームゲームの付帯イベントへ参加し、多くの人に新潟の生物と環境を周知することができた。

(1.1) 他園館との協力について

[総括]

サケのふるさと千歳水族館、上越市立水族博物館、ふくしま海洋科学館、なかがわ水遊園、葛西臨海水族園、富士湧水の里水族館、新江ノ島水族館、東海大学海洋科学博物館、新潟県立自然科学館、小諸市動物園と生物交換を実施した。

葛西臨海水族園、しながわ水族館、神戸市立須磨海浜水族園、下関市立しものせき水族館、札幌市円山動物園、いしかわ動物園、飯田市立動物園、よこはま動物園、市原ぞうの国、福山市立動物園とブリーディングローンを行っている。

ふくしま海洋科学館と共同で調査・採集活動を実施した。

ウミガラス展示水槽の冷却機が故障した際に、ブリーディングローンの借受先である葛西臨海水族園に修理完了までの間、ウミガラスを預かっていただいた。

市民ボランティア活動として実施してきた他園館視察は、新型コロナウイルス感染症防止のため本年度も中止した。

(1.2) 年間入館パスポートについて

[総括]

今年度の年間パスポートの購入者は、14,992 人(総入館者の 3.6%)、パスポート利用者(購入者+リピーター)は 90,208 人(総入館者の 21.6%)となった。また、パスポート利用者の平均入館者数は 6.0 回であった。

年間入館パスポート利用者数は新型コロナウイルス感染症拡大の影響が顕著に表れ、県を跨ぐ移動

が自粛される中、総入館者数に対する購入者及び利用者の割合は共に高い水準を維持している。購入者数は昨年度の 13,482 人から 1,510 人増加し、平成 20 年度の年間パスポート導入以来、最高の購入者数となった。コロナ禍の中で多くの市民の方に購入いただいたが、これは従来から館内外で積極的に広報したことや口コミによるお徳感などが購入者の増加に繋がったと考えられる。特に、例年実施している購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」は、新潟県がまん延節等重点地域に指定されたことにより期間を延長して実施し、多くの方に購入いただいた。キャンペーンをきっかけに年間パスポートへの需要が潜在的にあることが改めて伺えた。今後も話題提供や特別展示などの情報提供を行い、年間パスポート会員に繰り返し来館していただくことが入館者増、ひいては当館への評価向上に繋がると考えられる。

アンケート調査での「生き物の展示」について 97.5%の人が「非常に満足」「満足」と回答しており、テーマや季節感に沿った特別展示などを行い、生物の変化を発見できたことが評価されたと考えている。他にも「何度来ても楽しいです」「平日に幼児と 2 人で安心して遊ぶことができありがたいです」「いつも楽しませてもらっています」などの声のほか、「未永くマリニピアが続けていけますよう応援しています」など応援の声もいただいている。また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては 86.6%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

(13) 市・他団体等との協力

[総括]

今年度に行政や他団体等と協力して実施した事業は以下のとおりである。

水族館の集客力アップや安心・安全強化のため、他施設・他団体との協力が不可欠であり、当館だけではなしえなかったサービスを展開し、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、実施に制限がある中、多くのお客様から楽しんでもらい、満足してもらうことに繋がった。今後も、積極的に機会を捉え、他団体や民間の持つ多様なチャンネルを活かした事業に取り組んでいきたい。

① 新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設共通割引券」の導入

新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設利用促進」により、「文化・観光施設共通割引券」を実施した。新潟市だけでなく広域都市圏の方も割引料金で入館でき、2,111 人のお客様が来館された。

② 一般社団法人日本自動車連盟(JAF)会員割引

全国的な自動車ユーザー団体である一般社団法人日本自動車連盟と連携し、会員に対し当館のPRを行い、会員証提示で割引を行った。入館促進が図られ、35,709 人のお客様が来館された。

③ 内閣府が実施する「子育て支援パスポート事業」への協賛

内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通展開する「子育て支援パスポート」事業に協賛し、当該事業の会員に対し割引を行った。19,584 人のお客様が来館され、新潟の観光促進と当館の入館促進が図られた。

- ④ 新潟大学医歯学総合病院 小児病棟へのライブ配信
一昨年まで、新潟大学医歯学総合病院小児病棟への出張展示を実施していたが、昨年度以降、新型コロナウイルス感染症の影響で病棟での実施が困難であったことから、出張展示ではなく、ZOOM を利用したオンライン見学を実施した。
- ⑤ 県立がんセンター新潟病院 小児病棟へのライブ配信
昨年度 3 月に初めてオンライン見学を実施したところ、好評だったことから今年度は 6 月と 3 月に 2 回実施した。がんセンターでは入院中の病児への保育活動をボランティアが実施しているが、その活動時間に合わせ、ZOOM を利用して実施した。入院している患児と保護者は小児病棟のプレイルームの大型テレビや病室で観覧していた。約 1 時間で日本海大水槽、ペンギン、イルカ屋内プール、イルカショーなどをライブ配信した。来年度の実施も希望していることから、継続していきたいと考えている。
- ⑥ にいがた環境フェスティバル 2021 出展
10 月 31 日、万代島多目的広場(大かま)で開催された、新潟県主催「にいがた環境フェスティバル 2021」に出展した。出展ブースでは、ミズクラゲや新潟県内で見られる淡水生物の生体展示、当館での希少淡水魚の保全についてのパネルを展示した。Covid-19 の影響もあり、全体での入場者は少ない様子であったが、当館のブースにはのべ 400 人くらいが訪れ、水槽の生きものを観察し当館スタッフの解説を興味深く聞いてもらった。
- ⑦ 第 4 回ちょ～生きもの発表会
当館もメンバーであるにいがたダイバーシティネットワークを母体とした生きもの発表会実行委員会に当館も参加し、企画・当日運営の一翼を担った。会場は新潟県立生涯学習推進センターで、他にオンライン配信もおこなった。会場入場者は約 47 名であった。オンライン配信では当館アクアラボのモニターでパブリックビューイングを行った。本発表会には新潟県内で生きもの調査研究をしている NPO や高等学校生物部、博物館などが参加し、9 題の発表があった。当館からは「身近なカニの話」を発表した。
- ⑧ ジュニア学芸員講座
本講座は、当館もメンバーであるにいがたダイバーシティネットワークが主催し、新潟県立植物園など市内にある 6 つの施設の協力で行われた。対象者は中学生・高校生で、11 名が参加した。5 月 30 日に新潟県立植物園で行われた第 1 回から 3 月 19 日までの全 7 回のプログラムで、当館は第 2 回と第 7 回の修了式を行った。
- ⑨ 新潟市里潟研究ネットワーク会議への参加と上堰潟ガイドブック編集委員会への参加
昨年度参加している新潟市環境部環境政策課が事務局となっている新潟市里潟研究ネットワーク会議に今年度も引き続き参加した。また、新潟市が実施し当ネットワーク会議が深く関与する「地域が主役里潟保全事業」で毎年作成しているガイドブックについて、「上堰潟ガイドブック」の編集委員として当館スタッフが今年度も参加した。完成したガイドブックの表紙などに当館が撮影した空撮写真が採用された。

⑩ 小学校用ワークシートの制作・配布

小学校が校外学習で来館する際に利用できるワークシートを新潟市教育委員会の意見を伺いながら 3 種類作成し、新潟市内の小学校へ見本を配布した。今後も教育委員会に相談しながらより良いものを作成して予定である。

3. 入館料収入の実績について

令和 3 年度入館料収入 334,293,906 円

[総括]

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により入館者数は 418,578 人で、前年度の 364,392 人から 54,186 人増加したが、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標の 500,000 人には達しなかった。入館料収入も 334,293,906 円で昨年度の 296,047,488 円から 38,246,418 円増加したが、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標 452,500,000 円には達しなかった(112.9%)。客単価は 798 円で昨年度の 812 円から 14 円下がった。県をまたぐ移動が難しい中で、県外からの来館者が減少したことが要因と思われる。

コロナ禍で収入増対策は難しい状況であったが、学校の夏休みに合わせ、新潟市内の幼稚園・保育園、新潟市外県内と山形、福島、群馬の小学校へ割引券付チラシ(提示で 1 組全員 2 割引)を配布した。また、例年同様 12 月には冬場の閑散期対策として新潟市内の小学校、幼稚園・保育園に同様の割引券付チラシの配布などを行った。実施期間中、割引券チラシを利用したお客様が一定程度みられ、来館動機付けに一定の効果があったと考えられる。

全国で共通展開する「子育て支援パスポート事業」では、19,584 人のお客様に来館いただいた。昨年度から大幅に増加し、過去最高の数字となった。ホームページ上での案内を工夫するなど、この割引制度が全体的に周知されてきたと思われる。新潟市内のお客様については年間パスポートへの移行を今後も期待したい。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」や、同じくリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで 2 割引となる「JAF カード割引」も継続して実施している。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施しているが、今後も来館する幼稚園・保育園、小学校、老人施設、福祉施設など免除対象が増えることが見込まれる。質量ともに負担のかかる業務になることが予想されるが、団体休憩室の予約など状況を把握し不備のないよう行っていきたい。

4. 管理経費等の収支決算について

[総括]

必要な物品購入や委託、修繕工事等を十分に精査し経費削減に努めた。

人件費は、昇給に伴い増加傾向であるが、その他の管理経費は、経費削減に努め予算の範囲内で管理運営を行うことができた。

今年度、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、9月3日から16日までの14日間臨時休館を行った。水族館の管理に係る経費は、飼育生物の維持、設備の保守等でほとんど削減されるものはないが、観覧エリアの光熱水費約80万円を新潟市へ返納した。また、臨時休館により勤務を必要としない日が生じた場合は、当該日の扱いを正職員は年次有給休暇または休日・祝日振替とし、臨時職員は勤務扱いとして休業補償を行った。

6月に別館展示水槽の室温及び水温を冷却する設備(低温水チラーユニット)2機のうち1機が不具合となった。真夏の暑さがピークを迎えるこれからの時期に冷却機能が不足することは、展示生物(ウミガラス、バイカルアザラシ)の生命維持に影響を及ぼすため、緊急の改修工事が必要となった。当該改修工事で約8,000千円の経費を要することとなり、本来、2,500千円以上の工事は、新潟市水族館の管理に関する基本協定書により新潟市が負担することになっているが、新潟市と協議の上、指定管理料で支出することになった。

海水取水設備においては、埋設されている送水管からの漏水が3月に確認された。埋設管周辺を約3m掘削し原因を調査するとともにボルトの増し締めなどの応急措置を行った。一時的に漏水は止まったが、4月以降に恒久的な本工事を行う予定である。水族館の生命線である海水取水設備であることから、施工業者と密に連絡を取り協力しながら、毎年の保守点検等で今後も注視していかなければならない。

経費が嵩む修繕工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所のほか、リニューアル工事で更新した建物・設備についても、不具合が生じてきており、その都度修繕工事を行ってきた。一方で、経費を抑えるための対策として、時間外勤務の削減や光熱水費の夏場の最大電力を抑えるため設備の間欠運転、さらに空調の設定温度を上げるなど積極的な節約を行った。その他、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により入館者数の減少が予想されたことから、券売受付職員を1名減らして対応した。また、平成27年度末に導入した活魚輸送車を活用し、魚類搬入を計画的に行った。新型コロナウイルスの影響で県外への移動が難しい状況であったが、魚類購入の際、業者に依頼することなく自前で多くの魚類を購入・運搬することが出来たことから、経費削減をすることができた。

工事については、不具合による修繕工事費が依然として嵩んでいる。来年度も大規模修繕が発生した場合や不具合が予想される場合は、市と協議しながら行っていきたい。

次期指定管理期間も「最小コストで最適な管理」を目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

5. 最後に

今年度の入館者数は、418,578人(対前年度比114.9%)、入館料収入は、334,293,906円(対前年度比112.9%)で、新型コロナウイルス感染症の影響が大きかった昨年度と比較し大きく増加した。しかし、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数500,000人、入館料収入目標値452,500,000円にも遠く及ばなかった。平成25年のリニューアルオープン後、毎年500,000人以上の入館者数を維持してきたが、昨年に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大前までの回復に至らなかった。9月に新潟県独自の特別警報が全域に発令されたことに伴う臨時休館や1月には新潟県で初めてまん延防止等重点措置区域に指定されたことに伴う解説プログラムの休止などが影響した。依然として新型コロナウイルス感染症の影響は続いているが、感染症対策を十分行いながら入館者数の回復に努めたい。

しかしながら、全体の入館者数は減少したものの、年間パスポート購入者及びリピーター数が平成20

年度の導入以来、過去最高の数字となった。例年実施している「年パスキャンペーン」が、期間中にまん延防止等重点措置区域に指定されたため、お客様へのサービス向上を図り期間を延長した。期間中多くのお客様から年間パスポートを購入していただいたことから、年間パスポートに対する購入意識は依然として高い。新型コロナウイルス感染拡大により県をまたぐ移動が難しい状況の中で、新潟市内のお客様が多くを占める年間パスポート会員数を今後も維持できるよう努めていきたい。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が 97.4%、イルカショー、解説プログラムで「非常に満足」と「満足」の計が 94.5%と今年度も満足度は依然として高水準を保ち、多くのお客様に喜んでいただいている。

今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、県外からのお客様は少なかったと思われるが、年間パスポート会員を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が 32.2%(前年度 30.6%)と昨年度と比較し増加している。年数が経つにつれ「はじめて」が減ることは当然であるが、県外からのお客様は「はじめて」が全体の 70.0%と最も多く、まだ来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。一方、新潟市内のお客様は多くが複数回来館されており、「はじめて」は年々減少している。来館回数 4 回以上は全体の 62.1%と圧倒的に多く、当財団が掲げるビジョン「新潟で一番愛される施設」を心がけたことがこのような結果に繋がったと思われる。今後も、いつも来ても新鮮味のある展示に努めることで年間パスポート購入者の増加、さらにリピーターとして何度も足を運んでいただくことで入館者数増に繋げ、新潟市民に還元したいと考えている。

施設については、6 月に別館展示水槽の室温及び水温を冷却する設備(低温水チラーユニット)2 機のうち 1 機が不具合となった。展示生物(ウミガラス、バイカルアザラシ)の生命維持に影響を及ぼすため、緊急の改修工事を行い、約 8,000 千円の工事費を要した。本来、2,500 千円以上の工事は、新潟市水族館の管理に関する基本協定書により新潟市が負担することになっているが、新潟市と協議の上、指定管理料で支出することになった。その他のリニューアル工事の対象外であった箇所でも突発的な不具合が各所に生じている。またリニューアル工事を行った箇所にも徐々に不具合が生じ、件数も増加傾向にある。今後も不具合の発生が十分考えられることから、工事未着手の箇所に限らず、施設・設備全体を注意深く維持管理すると共に、設計会社が提案した修繕計画に基づき新潟市と相談し、早めの対応で不具合による事故が起こらないよう努めたい。

水族館を運営する上で重要な取水設備は、平成 30 年度に完了した取水管の延長工事により、現時点で取水口付近の海底面上昇による危機的状況は回避できている。しかし水管橋は劣化が著しかったため予算措置を求めた結果、新年度に改修工事が行われることとなった。取水設備は水族館の生命線である海水を調達するための重要な設備であることから、今後も注視していきたい。

また、駐車場は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で駐車する台数も例年と比較し少なかったが、ゴールデンウィークや夏季、9 月の大型連休期間中は多客が予想されたことから、周辺施設の協力により周辺施設が利用しない日に限り駐車場を借用した。一時的に飽和状態になる場面はあったが、駐車場不足には至らず、周辺道路の渋滞もほぼ見られなかった。海岸側臨時駐車場(ブロックヤード)の管理については、水族館のお客様以外の駐車車両が多く、指定管理者単独による管理は非常に困難になってきている。海岸側臨時駐車場からの道路の横断について、交通信号がなくお客様の安全が確保できないことが懸念されていたことから、多客が予想される日は警備員 1 名を配置した。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムや磯の生きもの解説など体験型プログラムを充実させている。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、イルカショーは昨年度から内容の変更やショー時間の短縮を行っている。各種解説プログラムは、まん延防止等重点措置適用期間中に、屋内で実施する「日本海大水槽解説」「磯のいきもの解説」「アクアラボ

体験」を休止としたが、この期間以外は感染対策を十分行いながら通常どおり実施した。定期的にも実施した「にいがたフィールドガイド」「いきもの教室」「田んぼ体験」などは感染対策を行いながら実施した。しかし、実施予定であった「ナイトツアー」は臨時休館のため一部中止し、「マリンピアカレッジ」「大人のための水族館講座」「いきもの教室」「育成室開放」はまん延防止等重点措置が適用されたため一部中止した。また、7月13日に飼育しているカマイルカが出産したことに伴い7月10日～20日の間、イルカショーを中止した。事前に周知していたこともあり、当日来館されたお客様からはご理解いただいた。その後、8月2日からカマイルカ親仔の一般公開を行った。

高病原性鳥インフルエンザ対策について、今年度は関東地方で陽性が確認されたものの新潟県内で確認されることがなかったため、ペンギン舎に防鳥ネットを設置することはなかった。今後も渡り鳥が飛来する時期は様々な方向から情報を集め、周辺地域で発生した場合は、マニュアルに沿った対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優先に被害の防止に努めたい。

WAZA(世界動物園水族館協会)からの残酷であるとの指摘により、和歌山県太地町でのイルカ追い込み漁でのイルカ入手が困難となっている問題については、当館が加盟するJAZA(公益社団法人日本動物園水族館協会)及びJAA(一般社団法人日本水族館協会)と引き続き協議しながら様々な可能性を探っていきたい。

当財団については、平成29年3月に公益財団の認定を受け、令和1年度より単独で5年間の指定管理者の指定を受け3年目の管理運営を行った。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で厳しい状況ではあるが、安定した水族館運営を行いながら、法人としても健全な経営ができるよう努めていきたい。

新型コロナウイルス感染拡大が依然として続いている状況ではあるが、今後も新潟市水族館のさらなる魅力づくりを目指し「水族館業務を行う専門家集団」として平成2年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。